

生徒の主体性を高める学級経営

齋藤 元

1 はじめに

大学卒業後、私立女子高校の非常勤講師を経て1973年に川崎市の中学校教員として採用され、川崎区内にあるK中学校に赴任した。当時は、管理職の異動が9月に行われていて、私の採用はその人事によって生じた欠員を補充するためのものであった。

当時の川崎市は、京浜工業地帯の一角を担う工業都市として栄えていて、人口も児童生徒数も急激に増加していた。採用される教員の人数も多く、同じ学校に同期採用の初任者が5名もいた。学校は、中小企業の工場と住宅が混在する地域で、初詣で有名な川崎大師にも近い典型的な下町といわれる地域の中にあった。当時の川崎は、工業地帯としてだけではなくギャンブルや花街として全国的に知られていて、現在の川崎市のイメージには程遠いダークな印象を持つ人が多い街だった。校舎や校庭からは京浜工業地帯の工場群と煤煙を大量に吐き出す何本もの煙突が見え、空は灰色かかっていたり時には赤茶色に濁っていることもあった。生徒の保護者は、工場労働者や町工場や商店などの自営業者が多く、夜の街で働いている人も少なくはなかった。生徒は、勉強は得意ではないが、純朴で素直な子や教員の気持ちや思いをストレートに受け止めてくれる子が多かった。中学生の時に出会った担任にあこがれ、子どものころからの目標であった教員になることができ意欲は満々であったが、教員としては未熟で頼り

ない私に多くの生徒が協力し助けてくれた。保護者も、頼りないばかりではなく時には我が儘な言動で突っ走ってしまう私を温かく見守ってくれ、様々な場面で協力し助けてくれた。夏休みに学級の生徒と一泊のキャンプに行く計画を立てていることを聞きつけて、長野県にある別荘を貸してくれるという保護者からの申し出があり、7名の男子生徒と一緒に一泊の旅行に出かけ、今では許されないと思うような素晴らしい貴重な体験をすることができた。今でも、クラス会や同窓会で会うと必ず話題に出るほど、彼らにとっても忘れられない思い出になっている。

保護者ばかりではなく、管理職や多くの先輩教員が、時には暴走してしまう若手教員に対して厳しく接することもあったが、大概是温かく見守り応援してくれた。また、教員大量採用が暫くの間続いたため、教員の3割ぐらいが20代であり、放課後等に数名が集まって教科指導・生徒指導・学級経営などについての情報交換や話し合いをするなど、多くの良い同僚にも恵まれた。中には、現職時代だけではなく今でも掛け替えのない友人として付き合っている仲間もいる。最近、教員の多忙化や若手教員のコミュニケーション能力の低下が指摘されることが度々ある。日本の中学校教員の勤務時間の長さが世界一という調査結果や精神的疾患等による休職者数の増加が続いているというニュースを目にすると、同業に居た者として心が痛む。現在に比べると時間的な余裕だけではなく

精神的な余裕もあり、教員同士だけではなく、生徒・保護者・地域も含めた協力や連携ができていた当時の恵まれた環境がとても懐かしく思われる。

学校の体制は、学年セクトや一部教員グループの排他的言動があるなどの問題はあるように思えたが、行事や研修等になれば全教職員が協力・連携する体制ができていて、その雰囲気が生徒にも伝わり行事が盛んで活気に溢れていた。研究や研修も全校体制で積極的に行われていて、毎年のように文部省(当時)や教育委員会等の委嘱・指定研究を受けていた。長年にわたり「教育工学」や「プログラム学習」に関する校内研究が行われていて、個人的にも関連した研究をしたり研修に参加している人が多かった。教員の研修に理解がある管理職が続き、外部で行われる研究や研修にも積極的に参加させてくれ、私も夏休みなどには多くの研修に参加させてもらい、今になって振り返ってみるととても恵まれていた思える。初任校での経験はその後の教員生活に大きな影響を与える。特に授業に関する研修・研究の機会を職場の内外で多く持つことができたことで、授業や教材研究、指導法の研究や工夫の大切さへの意識が高まった。

—当時のK中学校の主な研究—

- 「ダイレクトメソッドにおける英語教育研究」
・・・県教育委員会指定
- 「英語科教育研究」・・・県教育委員会指定
- 「保健体育科研究」・・・市教育委員会指定
- 「美術科教育研究」・・・市教育委員会指定
- 「社会科教育研究」・・・市教育委員会指定
- 「数学科教育研究」・・・市教育委員会指定
- 「授業課程における評価の研究」
・・・県実験学校・市教育委員会指定

上記のように多くの教科で教育委員会等の指定研究を受けていた。中学校の場合、教科での

研究だと他教科の教員は直接関わることは少ない。しかし、授業計画・指導案・指導法・評価・教育機器等々、どの教科でも共通した課題になる内容については全ての教員が関わる事ができた。当時の研修会は、お互いに率直に感想や意見を言い合い白熱した議論が行われた。時には20代の教員も積極的に発言し参加した。大学では経験することがなかった緊張感を味わい、多くのことを学ぶことができた。特に、教育工学や形成的評価についての研究先進校として市内の多くの学校から注目されていた。研究発表や研究報告会等が頻繁に行われたことも刺激となり、多くの教員が授業改善に意欲的に取り組んでいた。学習指導案はフローチャートで書くことになっていて、形成関係図・コースアウトライン・プログラム学習・フィードバックなど学生時代には耳にすることがなかったような専門用語が日常的に使われ、新しい教育法や知識に次々と出会うことも、研究意欲を高める要因となった。その様な状況であったK中学校で同じ時代を過ごした同じ世代の同僚たちは、それぞれが別々の学校に異動していったが、多くの人たちが各教科等の教育研究会の役員等中心的な役割を担い、やがては指導主事・研究会長等として大いに活躍した。初任者として赴任する学校がその後の教員としての姿勢や教員生活に影響があるという現れではないかと思っている。

2 学級担任として

—K中学校学校教育目標—

「知・徳・体・意」の調和のとれた人間性豊かな生徒を育成する」

- ①正しい判断力をもち、自ら学ぶ意欲のある人
- ②豊かな心をもち、思いやりのある、明るい人
- ③健全な心身をもち、進んで行動のできる人
- ④責任感をもち、忍耐強く物事をやり遂げる人

前述したように、授業に関しては先進的な研究に取り組み、全教員挙げて授業改革に取り組んでいたK中学校であったが、生徒指導に関しては教師主導で管理的な発想が主流であった。力による指導も度々行われていて、生徒にはそうした指導に対して不満を持つものも見られた。20代の教員の中に管理的な生徒指導に疑問を持つ人が何人かいた。いつの間にか、同じような考え方を持つ5～6名が、学校の古い体質を変えたいと思い、自分たちが何をすれば学校を変えることができるか話し合うようになった。仕事が終わると駅の近くにある喫茶店に集まり議論し、学年会議や職員会議で疑問に思ったことがあればできるだけ発言することにした。職員会議では、事前に役割や分担を決めて積極的に発言した。しかし、着任2～3年目の若手教員の提案や意見が他の教員からの理解や賛同を得ることはほとんどなかった。

2年目の4月に念願だった学級担任に就いた。私が初めて担当するクラスは2年8組だった。毎年のことだが、学年が変わりクラス替えがあると、多くの生徒は前のクラスの者同士で集まり「前のクラスが良かった」とか「前の担任が良かった」というような話をする。初めての担任である私のクラスでは、そんな生徒同士の会話が度々聞こえてきた。初担任であっても、他の担任に引けを取らない意欲と生徒を大切に思う思いはあった。しかし、学校教育目標や学習指導要領等に対する認識や理解を十分にしていたとはいえ、学級経営は計画性もなく試行錯誤の繰り返しであった。先輩教員の指導や姿勢を学び、同僚と情報交換を行い、とにかく毎日無我夢中で学級活動や生徒指導に取り組んでいた。生徒にはこのクラスで良かったと早く思ってもらいたい、そして彼ら同士がより良い人間関係を築き、さまざまな経験を通して成長して欲しいと思った。

学習指導要領第5章「特別活動」の中で、「学級活動」について次のように書かれている。

1 目標

学級活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる。

2 内容

学級を単位として、学級や学校の生活の充実と向上、生徒が当面する諸課題への対応に資する活動を行うこと。

(1) 学級や学校の生活づくり

㊦ 学級や学校における生活上の諸問題の解決

㊧ 学級内の組織づくりや仕事の分担処理
ウ 学校における多様な集団の生活の向上

(2) 適応と成長及び健康安全

㊦ 思春期の不安や悩みとその解決

㊧ 自己及び他者の個性の理解と尊重

㊨ 社会の一員としての自覚と責任

㊩ 男女相互の理解と協力

㊪ 望ましい人間関係の確立

カ ボランティア活動の意義の理解

㊫ 心身ともに健康で安全な生活態度や習慣形成

㊬ 性的な発達への適応

ケ 食育の観点を踏まえた学校給食と望ましい食習慣の形成

(3) 学業と進路

ア 学ぶことと働くことの意義の理解

㊭ 自主的な学習態度の形成と学校図書館の利用

㊮ 進路適性の吟味と進路情報の活用

エ 望ましい勤労観・職業観の形成

㊯ 主体的な進路の設計と将来設計

上記の具体的項目で、先頭のカタカナに○を記したものは、当時重点的に指導に取り組んでいたと思える項目である。とにかく、生徒の考えや思いなどを知るために、生徒一人ひとりと話す機会をできるだけ多く作っていかうと思っ

た。昼休みや放課後には教室に居て生徒の話を努めて聞くようにした。授業のこと、部活動のこと、友達のこと、家族のこと、好きな異性のことなどの話を聞くことができた。休日にクラスの生徒が私の家に遊びに来ることも度々あった。学校と違った雰囲気の中で心を開きいろいろな話をしてくれ、貴重な情報を得ることができた。学校から私の家が近かったせいもあるが、今ではほとんど見るできない光景だと思う。当時は、事務的な仕事、放課後の会議、研修会などが現在ほどは多くなく、生徒の管理もそれほど厳しく求められていなかったこともあり、そうした時間や機会を比較的容易に持つことができたのだと思っている。残念ながら、現状では教員にそのような時間的、精神的な余裕はなく、同じようなことをするのは難しい。教員が、生徒たちの考えや思いを十分に聞き、生徒同士のコミュニケーションを促し、生徒がお互いの気持ちや考えを知り合うことによって、協力する態度や思いやる気持ちを育てていくことができるのではないだろうか。「生徒一人ひとりが安心して楽しく過ごすことができるクラス」を作っていくために教師が何をしていくべきか、学校の現状をどう改めていくべきなのかが大きな課題だと思う。

3 学級での話し合い活動

週に1時間の特別活動(特活)の時間の中で話し合う機会をできるだけ作るようにした。しかし、最初からきちんとした話し合いができたわけではない。全員が話し合いのルールやマナーを理解し、スムーズに行われるように次のことを指導し徹底させた。

- ① 自分の意見や考えがある人は積極的に発言をする。
- ② 発言したいときには挙手をし、議長に指名されたら発言をする。
- ③ 他の人が発言しているときには、最後まできちんと聞く。

- ④ 安易に多数決に頼らず、議論を十分に行っても結論が出ないときなどに用いるようにして、その結果は全員で尊重する。

ルールやマナーが定着して、話し合いがきちんと行われるようになるまでには少し時間がかかった。しかし、当時は各学級にリーダー的な役割を担うことができる生徒が、男女ともに数名いた。2年8組には、誰とでも話すことができクラス全体への気配りもでき、多くの生徒から信頼されている生徒が男女ともにいて、二人とも生徒の話し合いで学級委員に選出された。学級会議の議長と副議長も彼らが兼ねることになった。二人は、話し合いのルール・マナーや私の考えていることなどをよく理解してくれ、期待以上にリーダーシップを発揮し議長・副議長の役割を果たしてくれた。何について話し合うかは、当分の間は時期やクラスの様子などを見ながら、担任が決めることにした。新学期の頃には、毎日の学校生活に関係があり、より多くの生徒が興味や関心をもって、話し合いに参加できるような議題となるように配慮し、生活班決め、席替えと席決め、係り活動などについて話し合った。席替えや生活班決めでは、多くの生徒が積極的に発言したが、個人の希望や思いばかりを優先させるような意見が出たり、早く結論を出したいために安易に決めようとする様子が見られた。そのような時には、話し合いの途中であっても、指導や注意すべきことがあれば適宜介入するようにした。また、他の生徒や学級全体への配慮や思いやりにかかるような発言についても、適宜指導や注意をするようにした。ときには、生徒だけで出した結論を認めず、話し合いのやり直しをさせたこともあった。生徒の自主性や主体性を尊重するためという理由で、話し合いを見ているだけで、問題がある発言や結論が出ていても認めてしまうのでは、担任としてすべき指導をしていないことになる。生徒同士が互いに高め合い成長するために

は、任せっぱなしではなく遠慮なく指導や注意をするべきだと思う。最近の傾向として、そのような指導が適切になされていないケースを時々見るがあった。

議長を中心として話し合いができるようになってからは、学級行事やレク、学級新聞の発行と内容などについて話し合うことにした。議題によっては様々な意見や提案が出て、調整したり上手に結論を引き出していくことが必要となった。しかし、途中で指導や注意をしなくても議長と副議長が中心となり、ほとんどの生徒が協力するようになっており、適切な結論を引き出すことができるようになっていた。そして、多くの生徒が他者への思いやりや配慮ができるようになり、良好な人間関係を築き始めるとともに、係り活動や学級レクなども徐々に行われるようになり、明るく活気のあるクラスとなっていった。

4 生活班と係り活動

生徒一人ひとりが、クラスの中で所属感と自己有用感を持てるように、男子3名と女子3名の計6名で生活班を作り、学級内の日常的な役割を各班で分担して行うことにした。最初の活動として、分担場所の清掃当番を班ごとで交代して行うことにした。清掃場所は、学校全体で三か所と決められていたので、学級会でそれぞれの場所をいくつの班で分担するか、ローテーションをどのように決めるかなどについて話し合った。班ごとに席に座り、検討項目を学級全体で話し合う前に、必ず班毎で話し合う時間を設けるように議長に支持をしておいた。分担もローテーションもスムーズに決まり、最後に各班で分担場所での一人ひとりの担当箇所について話し合っただけで決めた。それ以降、学級会では度々班を中心にした話し合い活動を取り入れるようにしていった。学級全体の中では発言できない生徒も、班のように少人数になると発言するようになり、参加しているという意識が高ま

り、いろいろな活動にも積極的に関わるようになっていった。

次に、各班で班長・副班長・レク係など一人一役で役割分担を決め、学級での日常的な仕事を行うことにした。学級会で話し合い、係りと仕事内容は次のように決まった。

① 班長

班会議の議長を務め、学級会の議題などについて話し合うために、毎週一回行われる班長会議に出席する。

(班長会議には、学級委員も出席する)

② 副班長

班長のいない時に代理をする。班会議等の記録を行う。

③ レク係

学級レクの企画や準備をする。レク当日は、中心になって運営する。

④ 新聞係

学級新聞を月に一回発行する。また、必要があるときにはアンケート調査を行う。

⑤ 掲示係

毎日の学校生活に必要な掲示物を作成し、掲示する。

⑥ 美化係

毎日の学校生活が快適に過ごせるように、教室や廊下の環境を整備する。

実際に活動していくと、班長、レク係、掲示係りなどは仕事が具体的で明確なため機能したが、副班長、美化係は仕事が曖昧であったため十分に機能しなかった。また、新聞係は記事を集めたり編集や執筆をする時間が、部活動などのために取ることができず、容易に発行することができなかった。そこで、新聞は、各班が交代で月に一回発行することとして、新聞係と副班長が中心となるように改めた。美化係については、教室内の環境と美化という役割でどのようなことをすれば良いのか考えていくことにした。また、掲示物については柔軟に取り組めるように次のように決めた。

- ・適宜各班でアイデアを出し、学級全体で話し合っただのようなものを作っていけば良いか決める。
- ・掲示物が少ない時は、各班の掲示係（人数が足りない場合は美化係も手伝う）が集まって作る。多い場合は、各班で分担して学級全で作る。

そして、生徒の提案で、委員と係一覧表（一人一役でどちらかを必ずやることにした）、各班の班員の名前と係の表、全員の誕生日一覧表、全員の自己紹介カード、季節や行事を盛り上げるポスターなどを作り、教室の掲示板や壁に貼ることになった。生徒の手づくりの掲示物が掲示され殺風景だった教室が、彩り豊かになり暖かい雰囲気になった。生徒にとっても、居心地の良い居場所であり快適な生活の場と感じられるようになった。その後も担任をしている間はずっと、生徒に掲示物を作るように仕向け、生徒のアイデアを生かした掲示物を作り教室や廊下を飾った。さらに、学年主任や教頭になってからも、他の教員に積極的に呼びかけ、学年全体や学校全体で掲示物作りを行うようにしていき、教室や校舎が少しでも明るく暖かな感じになるように取り組んだ。

5 日直日誌から個人ノートへ

日直は、男女1名ずつが座席順に毎日交代でやることにした。主な仕事は、朝の会と帰りの会の司会と明日の連絡、牛乳運び（給食は牛乳だけ）、授業後の黒板清掃、放課後の机や教室内の整理整頓等と決めた。そして、朝と帰りの会の内容と連絡事項、授業の様子、日直のひとことなどを日直日誌に記入して放課後提出する。担任は、感想やひとことに対する返事などを記入して翌朝返し、読み終えたら今日の日直に渡すというルールを決めた。時々、女子から「男子が日直の仕事をちゃんとやってくれませんか」という意見が出たこともあったが、一年間順番通りにほぼ全員が役割を果たした。日誌を

書くのはほとんどが女子で、スタートして1か月も経たないうちに、1ページでは収まらないほど書く生徒も出てきた。そこで、班ノートを作り、班員6人が交代でページの制限なく書きたいことを書いて放課後に提出することにした。それぞれの生徒が、その日の様子や感想、悩みや心配事、進路のこと、家族や友達のことなど、いろいろなことを書いてくれた。学校で書ききれない「担任の返信」は、ノートを家に持ち帰って夜遅くまで書いて、できるだけ翌朝までには返すようにした。班ノートを初めてから、生徒の気持ちや思いを知る機会と担任の考えや思いを生徒に伝える機会が増え、生徒との人間関係が少しずつ深まっていくように思えた。

班ノートをスタートさせてから1か月ほど経った時に、ある生徒から「班ノートだと他の人に見られてしまうので、秘密にしたいことや他の人には知られたくないことなどは書けない。個人ノートを書いて先生と交換したい。」という申し出があった。他にもやってみみたい生徒がいるのか聞いたところ、10名前後の希望者がいたので、希望者のみの実施でいつ出しても良いということでスタートした。ほとんどが女子であったが、数名の男子も参加した。書いてくる内容はさまざま、家に持ち帰ってから読んで返事を書くことが多かった。好きな異性について、家族の悩み、友達とのけんかや仲たがいなどについて書いてあることが多く、どの生徒も真剣に書いてくるので真剣に返事を書くように心がけた。時には相当な時間を要しかなりの労力を費やすことになったが、生徒の気持ちや思いなどをより深く理解できるようになり、楽しさとやりがいを感じた。生徒にとっても担任との距離が近く感じられて、さまざまな悩みや心配事などの解決のきっかけになり、保護者や友達、学校などに対する不満のはけ口にもなり、とても良い経験や思い出となったようだ。最近開催された同窓会で10数名の教え子に、当時の思いや気持ちなどを教えてほしいとお願

いしたところ、後日8名からの便りが届いた。

- ・スマホなどない時代でしたから、班ノートは友だちとの交換日記の様に気軽にたわいもないことを書いていましたが、やはり本音では言いずらかったり面倒くさがり屋もいて、次第に個人ノートになっていったように記憶しています。放課後残ってまで相談するほどの事でもなくてもクラス内であつたちょっと良い事、気になる事、又、友達同士のいざこざ、最終的には恋愛相談までしていたような・・・、今思うと赤面です。ご多忙であつたと思いますが、先生は必ず適切なコメントを記入し、解決策を導いてくださいました。それができたのは、先生が本気で生徒に向かい合ってくださるという信頼感があつたからです。(K M)
- ・個人ノートは、クラスのこと、好きな人のこと、担任のこと、性に関することなどを・・。先生からの返事が楽しみでした。(A H)
- ・個人ノートは、とても楽しかったし、やり取りの中で心を癒してくれました。(Y I)
- ・先生との交換ノートで、思ったことをストレートに何でも書いていたと思います。先生だからという遠慮は全くなかったかもしれません。先生の返事が楽しみで、一生懸命に書いていたかもしれません。(Y I)
- ・先生とのやり取りで書いた内容は覚えていませんが、先生の奥様の手作りの愛妻弁当のおつゆがこぼれて、私のノートに茶色い染みがつき、先生が謝ってくださったのを覚えています。赤いノートでした。(T S)

中学生になると自我が確立され、悩みや心配事が増えてくる。家族よりも友達存在感が増し、おしゃべりや相談相手は仲の良い友達になってくる。学年が進むにつれて親友と呼べる友達ができる。そうした彼らの人間関係を見守り、時にはサポートしてあげる。中には、なかなか親友と言える友達ができない生徒もいる。

親友がいても話せない悩みや心配ごとができる場合もある。そんな時に、話を聞いてあげたり相談に乗ってあげることができる担任でいたいという思いがあつた。教え子達の当時の気持ちや思い出を知ることができ、夢中だった1年間が思い出された。

6 学級通信

生徒の考えや気持ちを知りたいという思いは、班ノートや個人ノート、昼休みや放課後の会話で少しずつ実現できたように思えた。初めての担任として、生徒や多くの先輩・同僚の協力のお蔭で大きな問題もなく夏休みを迎えることができた。2学期になると少しずつ問題や課題が見えてきて、担任として生徒に言いたいことや伝えたいことが増えてきたが、そのための時間はなかなか取れない。そんな時、同じように初めて担任をしている同期の教員が、学級通信を発行していることを知った。彼は、近隣の小学校で学級通信を毎週発行している教員がいることを教えてくれた。その学級通信は一冊の本になり発刊されていたことを知り、早速手に入れて読んでみた。担任としての思いが詰まっている二人の教員の学級通信を見て、2学期から学級通信「草」を発行することにした。第1号は、生徒の意見や思いを載せて保護者に向けての発行となった。何名かの生徒が書いた意見を原文のまま載せることにした。

生徒の声から

- ・最近、中学生の自殺がはやっているようだ。今の教育が僕たち中学生と合わないことを、口で示さずに態度で示しているのだと思う。なぜ口で示さなかったかといえ、それは口で示してもダメだと知っているからにちがいない。教師や大人達の強制的圧迫に押されて、自殺という結果が生じてくるのだと思う。大人達は、もっと僕達の本当の気持ちをよく知ってほしい。

- ・男女交際についてももう少しわかってほしい。みんな友達として付き合っているのだから、大人の付き合いみたいに不潔な交際でないんだから、もう少しわかってほしい。
- ・大人は、自分が悪い時でも子どもにあやまらない、ずるいな。
- ・お母さんがやさしいのは、勉強しているときだけ。勉強していれば怒らない。高校だってお母さんが勝手に決める。そんなの勝手だと思う。
- ・怒られても、僕はちゃんとわかっています。僕のことを考えていてくれるんだなって。

2年8組学級通信「草」第1号から

約40年前の中学2年生の生の声だ。最近の中学生の悩みや思いと同じように思える。彼らは、下町で育ち放課後は部活動に夢中で取り組み、友達や仲間を大切にしている普通の中学生だ。ときには、校則に違反する行為をしたり補導された者もいた。若くて経験の少ない教員達は、私だけではなく全員が、時間を割いて彼らと向かい合い毎日を必死で過ごしていたように思う。今の中学生がここまで率直に大人に対する意見や思いを書くことができるだろうか。その後も、毎週発行し続けた学級通信には、生徒の声と担任の思いや考えを載せるようにしたが、徐々に保護者向けから生徒向けへと変わっていった。コミュニケーション能力、自己表現力、自立心等の不足が指摘されてから久しく、様々な施策や取り組みが提言され、研修や研究も行われてきた。しかし、教員が良かれと思い、生徒のための取り組みや活動をしようと思っても、簡単には実行できない。生徒に向かい合い、語り合う時間を確保することができないだけでなく、目に見えぬ制約があるように思える。授業時間の確保や指導力向上だけでは解決できない多くの課題があるのではないだろうか。当時の教え子からの便りの中に、学級委員をしていた2人から、中学校時代を振り返りながら親となつてからの思いも書いてくれたものがあつ

た。

「中学校生活は、小学校までと違いクラスのつながりだけでなく、部活や体育祭など横のつながりや縦のつながりもでき、人間関係が広がります。又、先生方も少しずつ成長していく生徒に、上から目線ではなく、こちらの意見を尊重して接して下さる場面が増えました。本音で物を言うからぶつかることもありましたが、クラスの問題を放課後残って皆で共有したことが良かったと思います。職員会議の呼び出しを無視(?)してまで、喧嘩した当事者が納得するまで話をさせ、直接関わらない者もその様子を見ていたのを覚えています。その時、会議より私たちのことを大切に思っていて下さるのだと驚き、何度も迎えに来る他の先生に内心ハラハラ見守っていました。今では許されない事かもしれないかもしれませんが、休日に先生と皆で観光地に行ったり、旅行に行ったり、はたまた先生のお宅に伺い奥様の手料理をいただいたりと、よく生徒のわがままに付き合ってくださいました。授業を受けているだけではわからない、先生や友達の素の部分がかい間見られ、より一層人間関係が深まったと思います。メールやLINEではなく直接話をしたことで、誤解が解けたこともあります。勉強や部活は自分自身で努力しなければなりません、友人や恋愛問題は自分だけでは解決できません。つまりいたり挫折したりした時に助けてくれたのは友達です。2年8組で良い仲間と巡り会えた事が、中学校生活の何よりの宝物です。

私も3人の子を持ち、多くの先生にお世話になってきましたが、先生方も人間ですからいろいろな方がいらっしやいました。授業の進め方は、私は素人なのでよくわかりませんが、子ども達が慕い親も安心しておまかせできると感じた方は、子どものことをきちんと見ていて下さる方です。理屈ではなく肌で感じました。」

(K M)

彼女は、2年8組の女子学級委員だった。成績は優秀で周囲への気配りができ思いやりもある生徒で、級友からの信頼は絶大だった。2年8組での良い仲間に出会えたことを「何よりの宝物」と言ってくれたことが、元担任としてとても嬉しかった。

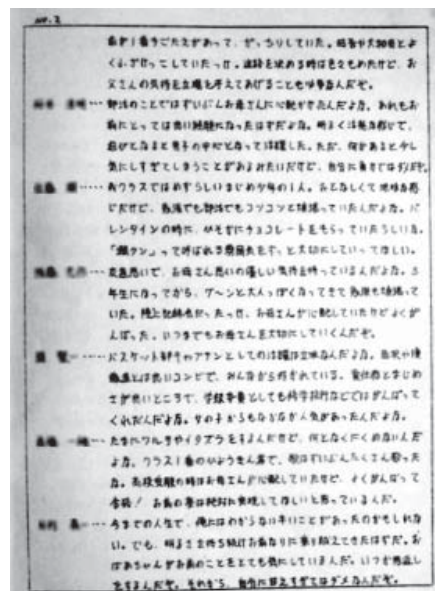
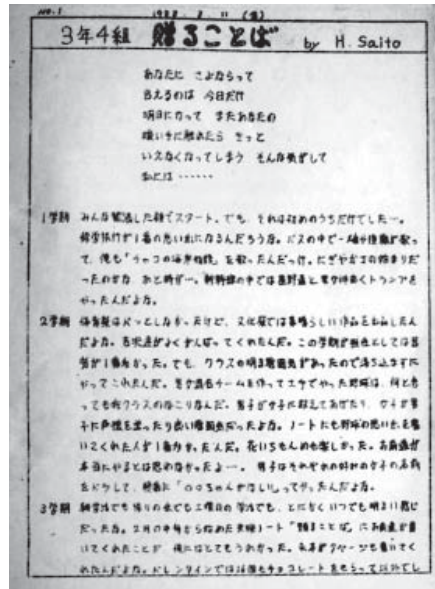
「私が教師を目指したのは、先生のクラスになってとても素晴らしい中学生活を送れたのがきっかけでした。大学卒業後も何度も採用試験を受け、学習塾の講師やM中学校の非常勤講師も経験しました。特に、M中の時は非常勤講師でありながら、担任や剣道部の顧問もしました。そこで、いつも思い出し実践したのは齋藤先生のすがたでした。おかげ様で、私のクラスは勉強は中ぐらいでしたが、体育祭や風揚げ大会では上位になりました。特に、風揚げ大会ではクラス全員と私の連凧をみごとに大空へ揚げました。林間学校では、教員採用試験の日と重なったため遅れての参加となりましたが、クラスの皆が私のことを迎えてくれたのがうれしかったです。

私は、現在父の仕事を継ぎ宅地建物取引業を営んでいますが、先生と過ごした短い期間に、私の人生に大きな方向づけをしていただいたと感謝しています。そして、子供を持つ親として当時のことを原点にして子供と接しています。」
(Y K)

彼は、男子の学級委員だった。問題行動を起こすような生徒とも他の生徒と同じように接することができ、正義感が強くリーダーシップもあり、彼のお陰でクラスを一つにまとめることができたと思う。3年生では、生徒会長、剣道部長を務め学校全体のリーダーとして活躍した。大学卒業ご非常勤や臨任教員をやりながら教員採用試験に挑んだが合格する前に、家庭の都合で父親の経営する不動産店を引き継ぐことになった。そのまま教員を続けてほしかったが、今では、不動産業界の役員や同窓会の代表世話

人などを引受け活躍している。

2年生からの初めての担任ということで、当初は私にも生徒にも戸惑いはあったが、彼らとの語らいや共に行動し、活動することが何よりも楽しい1年間だった。たった1年間の触れ合いだったが、私にとって初めての経験ばかりであり担任としての原点となった。



3年4組学級通信最終号

「もう一年が経ってしまった。初めての学級担任になり教室にはいるとき、なんとなく照れくさかった最初の日から、一年が経ってしまった。“楽しい明るいクラスにしよう”というスローガンを掲げて、僕は僕なりに一生懸命やってきた。」という始まりで学級通信を書き、43名の生徒一人ひとりに「贈ることば」を綴って、終業式後の最後の学活で配った。それ以来、担任をし続けることになるが、終業式や卒業式後行う最後の学活では同様の学級通信最終号を発行し続けてきた。

7 初めての3年間持ち上がりの担任

次年度は、持ち上がりで3年生の担任を希望したが、1年7組の担任となった。しばらくの間は、持ち上がることができなかつた悔を捨てきれず、初担任の時ほどには意欲的にはなれなかつた。しかし、活動的で元気いっぱい1年生と触れ合っていくうちに、前の学級以上に「生徒同士が仲良く生活し、安心して楽しく過ごすことができるクラスをつくっていきたい」という思いを強く持つようになった。そして、担任として彼らとともに生活する3年間が始まった。

担任と生徒、生徒同士の人間関係が良好でなければ、安心して楽しく過ごすことができる学級にはならないという考えから、話し合いとコミュニケーションを大切に学級経営をしたと思った。さらに、昨年度の学級経営や学級活動等について振り返ってみると、班ノートと個人ノートは反響が大きく生徒を理解する上で非常に役立ったので両方とも行うことにした。生徒が発行する新聞については、学級新聞は担当者が集まる時間が取りにくく予定通りには発行できなかったため、班新聞だけを不定期で発行することにした。掲示物については、教室を「居心地の良い生活の場所」と思えるようにするために、生徒が主体的に発案したものを作成し、掲示していくことにした。

話し合い活動については、1年生でも指導を適切に行えば可能だと考え、学活の時間や班活動などを中心にして積極的に取り入れることにした。頻繁に取り入れ話し合う機会をできるだけ多く作ることによって、生徒同士の意思疎通や相互理解が進み、男女に関係なく協力し合っ学級活動・行事・レクなどに取り組むことができるクラスになった。ただ、生徒の話し合いの結論を優先したり要望を尊重するあまりに、無計画に学級活動や行事・レクなどを行ってしまったので、学級活動全体を計画的に実施するよう改めることにした。とくに、学校全体の年間予定を考慮することと、学校行事や学年行事の実施や準備等にも配慮して計画を立てるようにした。

8 学級通信を生かした学級経営

学級通信を始めてみようと思うきっかけになったのは、前述した二人の教員の学級通信だった。前年度は夏休み明けの頃に第一号を発行し、7号しか出すことができなかった。当時は、学級通信を発行することに対して、「学年の調和を壊すことになる」等の理由で否定的な教員も少なくなかつた。それでも気が付くと、K中学校では何名かの教員が学級通信を出していた。特に、放課後に学校の問題などについて話し合うグループの若手教員は、ほぼ全員が出していた。今年度からは毎週発行しようという誓いを立て、4月8日に第一号を発行した。1年7組学級通信「仮面ライダー」という名前を付け、必ず巻頭に詩を載せることにした。

青春貴族

一番だいじなものは何 決まっているさ友達さ
一番きらいなものは何 おあいにくさま勉強さ
頭のできは良くないが 心の出来は最高さ
根っから気のいいやつばかり
青春貴族だ 俺たちは

1年7組スタート

今日から、いよいよ1年7組の実質的な生活がスタートしました。自己紹介を1人1人にしてもらったのですが、ほとんどの人が楽しい明るいクラスにしてほしいという希望を述べていました。女子の中には「男子の人は、覚悟しておいて下さい」とか、「素敵なB・Fを探します」などと、なかなかいさましい人もいたようです。なるほど、初めての清掃のときには、圧倒的に女生徒優位に進んでいたようです。男子諸君にも頑張してほしいですね……。そして、これから1年間、いやおうなしに出会わせた44人の仲間達と様々な経験をしていき、1人1人が主体的に生きていくエネルギーを貯えていってほしいと思っています。自分の考えを持ち、自分の生き方をしっかり見つめることのできるような、そんな1人1人になってほしいと……。

1年7組学級通信第「仮面ライダー」1号から

彼らとの日々の生活の中で感じたことや思ったことを、生徒向けに書くことにした。初めの頃はガリ版と鉄筆を使って書いていたので、B4版1枚を書くのには相当の時間を要したが、食い入るように読んでいる生徒の姿を見ていたので、毎週発行することは苦にならなかった。さらに、他の教員と学級通信を交換したり、何人かの先輩に読んでもらったりして、感想や批評を聞けるようになり、より良い学級通信にしていきたいという気持ちが強くなっていった。それらをきっかけに、気が合う仲間の教員だけと話をするのではなく、より多くの様々な世代の同僚と話す機会が増え、それまでにはなかった多くのアドバイスや示唆を得ることができるようになった。教員の仕事は人を相手にするので、毎日に変化に富んでいて、マニュアル通りにいかないことの方が多い。それぞれの問題や場面でどう対応し指導すべきか、理屈や理論だけでは答えが出ないことが多い。様々な経験によって学び、指導力や対応力が身に付き成長す

ることができる。良き仲間や先輩に恵まれ、ときには厳しい指摘を受けたが、教員生活の原点となる様々なことを学ぶことができた掛け替えのない日々となった。

担任も2年目になったので気持ちの余裕ができ、生徒を落ち着いて観察ができるようになってきた。毎日の朝の会と帰りの会、昼食指導、清掃指導、週4時間の英語の授業、週1回の学活と道徳の授業が、通常は担任としてクラスの生徒と接することができる時間だった。それらの限られた時間の中で生徒と語らい、観察をし、時には他の生徒や教員などの話の中から生徒の様子や変化を探っていくようにした。さらに、昼休みや放課後などに触れ合うチャンスを見つけて話をしたり観察をした。班ノートや個人ノートからの情報はそれらにも増して貴重であった。そのようにして、生徒一人ひとりと学級全体の変化や問題などを探っていく。採用3年目で学年や校務分掌の役割もそれほど負担となるものではなく、担任としての時間がかかり自由に取れたのでできたのだと思うが、そうした時間にやりがいを感じ楽しかった。最近の若い教員にも生徒との触れ合いを求め、話をしたり相談にのってあげたいと思っている者は大勢いるはずだ。繰り返すようだが、そうしたことが実行できる時間的な、或いは精神的な余裕が持てるようにしていくことも学校現場に求められているのではないだろうか。

生徒を取り巻く問題や課題とともに、学級全体の問題や課題が見えてくると、当然のことだが担任として何をすべきか考える。個々の生徒と向き合っていくながら個別に対応、解決したほうが良い場合と、学級全体に呼びかけて皆で話し合い考えて解決したほうが良い場合とがある。全体に呼びかけたほうが良いと思った場合に、学級通信を利用するようにした。タイムリーに話題や問題を取り上げるようにするために、良い話やちょっとした問題等に気づいたとき記録するように、ポケットにメモ用紙を入れて持ち歩くようになった。朝の会と帰りの会、

昼食と昼休み、清掃活動の時などに、メモをすることが多かった。特に、生徒にまつわる良い話は忘れずメモをしておき、学級通信でさりげなく取り上げるようにした。やがて、生徒へ向けて書いたことがきっかけで、生徒だけではなく保護者も感想や思いを書いてくれるようになり、学級通信を使った三者のコミュニケーションの輪が広がることになった。

ひと味足りない「よい子」たち

僕達は、よく「あの子はよい子だ」という言葉を口にしたり耳にしたりします。大体の場合、そのよい子というのは、決められていることは全てきちんと守り、大人の言うことを何でも素直に聞いているような子を意味しているようです。そして、僕自身の中にも、そのようなよい子を歓迎する気持ちがないとは言えません。しかし、そのように与えられた中でしか生活をしなかった子ども達が、誰からも指示されずに、自分の行動や生き方を自分自身で決めなければならなくなったとき、いったいどうするのでしょうか。また、身の周りに矛盾や不合理な問題が生じ、それらを押し付けられたとき、何もできずにいることになってしまうのではないのでしょうか。よく日本人は、批判力や創造力が欠けていると言われてます。・・・・・・(担任)

1年7組「学級通信仮面ナイダー」4号から

「よい子について」を読んで

私、これを読んで小学校の廊下に貼ってあった「よい子のきまり」を思い出しました。「よい子だからきまりを守りなさい」というのか「きまりを守ればよい子」なのか、考えれば考えるほど頭が混乱してきます。では、いくつかのきまりを守らない人はというと、当然「悪い子」ということになります。だれだって「悪い子」とは、言われたくないはず。そう言われたいためには、先生の言うように大人の言う事を素直に聞くしかないの

です。理由はどうであろうと、大人の言うことに同意しなければ「生意気だ」と言われるのです。つまり「よい子」とは、大人達が勝手にそう決めつけているだけであり、強制的にしたてあげているとしか思えません。私は、そんな意味での「よい子」になりたくありませんし、言われたくありません。ただ単に、「よい子」「悪い子」と決めつけるのではなく、どうしてきまりを守れないのかなぜ賛成できないのか、そこまで考えてほしいと思います。・・・・・・(生徒 M)

1年7組学級通信「仮面ナイダー」5号から

学級通信を読んで、上記のような意見が個人ノートに書いてあった。その生徒は、誰から見ても模範的で典型的な「よい子」であったので正直驚いた。率直な思いを書いたくれたので、他の生徒に読んでほしいと思い、本人の了解を得て学級通信に載せさせてもらった。

詩

むかしから あいつは 何かに熱中すると
わき目もふらず つっぱして行っちゃう
先に ゴールが見えようと 見えまいと
たとえ 他人のことであっても
愛する人のためならば
自分から身を引くこともいとわず
自分を傷つけてでも
相手のしあわせを願ってやれるやつ
「今の子供は・・・」
ああ 大人たちは ただそれだけをくり返す
「今の子供ときたら・・・」
ただ それだけ—————涙！

1年7組学級通信「仮面ナイダー」6号から

一人の女子生徒が、学級通信のやり取りを見て、個人ノートに書いた詩だ。本人の了解を得て、学級通信の巻頭に載せている詩に使わせてもらった。この生徒も、リーダーとして活躍するいわゆる「よい子」だった。

その後、生徒達は友情や喧嘩などについても様々な思いや意見を書いてくれた。中学生としてのどのように生活していくべきなのか、勉強はどうしてしなければいけないのかというようなことも話題となっていた。次の記事がきっかけとなり、多くの意見や思いが寄せられた。

「俺、あきらめているんだ」

先生、俺は自分でもっとしっかり勉強しなくてはいけないと思うけどさ、俺の親ときたらもうひどいんだ。勉強！勉強！うるさいったらありゃあしない。やろうという気持ちがあってもさ、そんなこと言われるんじゃあやる気半減だよ。何だかんだ言って、結局は親が満足するようにしむけられているんだ。俺、やんなっちゃうよ。先生もそんなことあっただろう。家出しようとか、自殺しようとか、いろいろ考えるけどどうせ自分のためにもなるんだし、さからってもしょうがないだろうと思ってあきらめてるんだ。「仮面ライダー」に出して。

1年7組学級通信「仮面ライダー」7号から

彼は、個人ノートに書いてきた。親がうるさいと思うが、勉強は自分のためだとも思っている。家出や自殺も脳裏に浮かび真剣に悩んでいる気持ちが伝わってきた。そして、学級通信に載せてほしいと書いてあったので、すぐに載せさせてもらった。すぐに、次の様な声が寄せられた。

塾についての私の考え

私は、塾って親を安心させるための自動販売機みたいなものだとおもうの。たとえば、お母さん方は、子供が塾に行っていれば勉強しているのだと思込んでいる。それは塾へ行ったらしっかり勉強している子もいると思うの。でも、子供にしたらそれだけ自由な時間はとれるし、塾に友達もいる。遊びの楽園じゃあないの？ 高校受験なんかでいっしょうけ

んめい塾へ行かせるお母さんも、子供自身のためと思って行かせているみたいだけど、私はそういう自動販売機の中へ入れられるよりも、家にいてお母さんの愛情につつまれていれば「勉強しようかな」って思うな。(塾へ行かせているお母さん方は愛情がないというわけではないのよ。)

1年7組学級通信「仮面ライダー」8号から

当時は、中学1年生で塾へ行っている生徒はあまり多くなかった。彼女は、母親の気持ちや愛情を理解しているけど塾に行かせようとすることに疑問を感じている。それでも、母親が大好きだという気持ちが伝わってきて安心した。

子供たちの声に対して、私も学級通信に「どうして勉強をするべきなのか」や「英語はどうして勉強するのか」などについて自分なりの考えを書いた。すると、一人の母親が手紙をくれた。

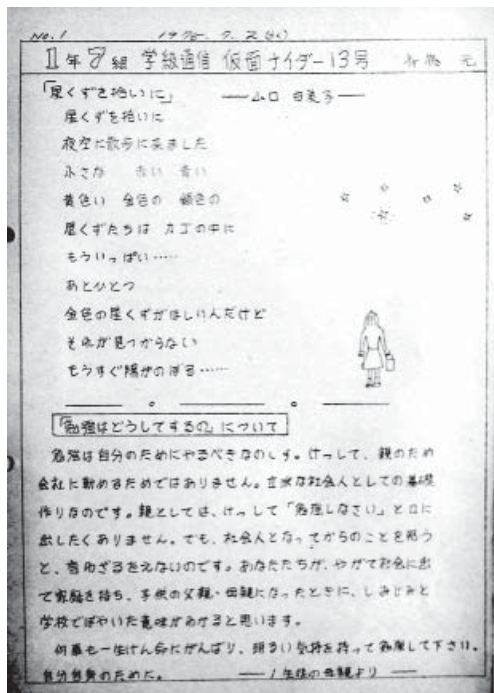
「勉強はどうしてするの」について

勉強は自分のためにやるべきなのです。けっして、親のため、会社に勤めるためではありません。立派な社会人としての基礎作りなのです。親としては、けっして「勉強しなさい」と口に出したくありません。でも、社会人となってからのことを思うと、言わざるをえないのです。あなたたちが、やがて社会に出て家庭を持ち、子供の父親、母親になったときに、しみじみと学校でぼやいた意味がわかると思います。何事も一生けん命にがんばり、明るい気持ちを持って勉強してください。自分自身のために。

1年生の母親より

1年7組学級通信「仮面ライダー」13号から

心からの感謝をお伝えして、学級通信に載せさせていただいた。中学生になると、親子で話し合う機会が減ってくる。本音をぶつけ合う機会もめったにない。学級通信や班ノート・個人



1年7組学級通信仮面ライダー13号

ノートを紹介して、親子の会話が生まれ、お互いの理解が進むことを願った。

それにしても、中学1年生が自分の考えを持っていて、親の愛情もきちんと理解していることに感服した。それでも多感な年頃となり、悩みや不安を抱え迷っている。そんな中、同じ学級で生活する仲間と出会い、掛け替えのない友達を見つけ本音をぶつけ合えるようになってきて、元気一杯に学校生活を送っている彼らに、担任としてできる限りのことをしていきたいと思った。保護者の理解と協力を得ていることを実感し、担任としてもっともやりがいを感じた時期だったように思える。

当時の教え子達から、学級通信についての次の様な感想や思い出が寄せられてきた。

- ・学級通信のこと覚えています。それは、今振り返って思い出すと先生が生徒をどれだけ見ていてくれているかを推し量ったものかもしれません。学級通信を読んで先生との距離間

に安心感を得ていたのかも知れません。

(A S)

- ・毎回楽しみにしていて、配られたそのときに読んでいました。まずは、自分のことが書いてあるかどうか探していました。友人のことでも、「ゲン先生はこう思っているのか・・・」と感想を持ちながら、新たな発見をしたこともありました。とにかく、話し言葉で書かれてあったのが、親しみを感じた要因でした。もちろん当時は手書きだったので、そのことも一因です。

(Y T)

- ・クラスで起こっていること、先生の思い、その話題に合った歌、歌詞等、楽しんで読んでいました。生徒が何かを考えるきっかけになったように思います。

(K S)

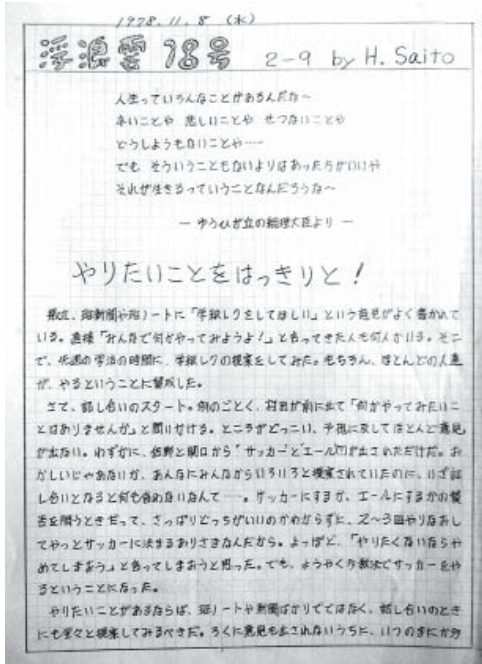
- ・自分のことが書かれているのを見ると、ちゃんと見てくれているのがわかる。クラスの話題も理解しやすく書かれていた。

(Y S)

- ・担任の先生が、何を思っているのかを理解でき、話した言葉で聞くよりも、自分で考えることができたと思う。

(Y E)

学級通信は、朝の会や帰りの会、時には学活の時間に配布した。多くの生徒が真剣に読んでくれていることが嬉しかった。彼らが書いてくれた感想や思い出を見て、当時に何を思ったり考えていたのかが垣間見えたような気がする。担任がクラスの生徒一人ひとりを見ているだけではなく、それを生徒に伝えることの大切さと、担任が生徒やクラスについて何を思い、どのようなことを考えているのかを伝えることの大切さなどが再確認できた。そして、生徒達にまつわる話題を伝えることによって、生徒同士の相互理解や人間関係の深まりが進み、クラスについての思いを語り掛けることによって、問題や課題を解決し、より良いクラスにしていこうとする気持ちが芽生えていったという当時の見立てが、間違っていなかったことも確認することができた。



2年9組学級通信浮浪雲18号

9 学級新聞

主に、2校の小学校から入学してきた生徒たちは、1か月もしないうちに出身校に関係のない友人関係を築き始めていた。男女が協力し話し合うような場面も自然に見られるようになってきた。係り活動や班活動も軌道に乗り始めたのを見計らって、学級新聞を発行することを提案した。昨年度の反省から、班ごとに交代で発行することにして、新聞の名前も班ごとに決めて良いことにした。学活の時間に、班で新聞名や仕事分担などを話し合い、最後に発行する順番を決めることにした。話し合いの結果、発行の順番や期日は決めず1か月に1回程度発行するというので、「学級新聞」ではなくて「班新聞」にすることになった。私の提案とは少し違った結論になったが、彼らの話し合いの結果を尊重することにした。

学活での話し合いは比較的活発で、結論もスムーズに出たので、すぐにどこかの班から第一

号が発行されるのではないかと期待していた。放課後などに班で集まり、話し合っている姿を時々見かけた。しかし、放課後や朝は毎日のように部活動があり、落ち着いて話し合ったり相談することができないようだったので、再度学活の時間を使い記事の内容、執筆担当者、発行予定日などについて話し合い、原稿用紙も渡しておくことにした。そして数日後、第1号が発行されることになった。そうした経過の中から、生徒に新たな活動をさせたいときには、かなりの指導と時間が必要であることと、ある程度細かな指示やサポートが必要だというようなことを知った。また、決まったらまかせっぱなしにするのではなく、進行状況や問題が生じていないかなどを確認するために、適度の声掛けも必要だということを学んだ。

1つの班から第一号が発行されると、続いて他の班からも発行されるようになってきた。クラスの問題、課題などにもできるだけ触れるように指導したはずだが、記事の内容については班によって様々だった。好きな歌手や漫画、テレビ番組、勉強やその他に関するアンケート、異性や男女交際について、自分たちの考えや意見など多岐にわたっていた。彼らの生の声や思いを表すことができる良い機会であると思い、よほどふさわしくなかったり大きな問題がないかぎりは口出しや規制はしなかった。生徒からこんな呼びかけや提案がされた。

「提案しま〜す！」

このクラスには六つの班があるけど、班の中での活動にはどんなものがあるのかな〜。

1. 掃除 2. 班ノート 3. 新聞作り
これくらいじゃないのかな？ もっともっと班の仲を深めるにはどうしたらよいでしょうか？

そこで一つ提案しま〜す。祭日や学活などを利用して、班別対抗バレーボール大会などいろいろなことをしたらどうでしょうか？ 優勝した班には賞状を作ってあげたり、ビリの

班には罰ゲームをやらせたり・・・, とっても良いことだと思うけど・・・, みんなもこの提案について, よく考えておいてください!

4班新聞「榊嵐坊漫」第3号から



4班新聞「榊嵐坊漫」第3号

この呼びかけに対して, 班対抗の球技大会をやりたいという意見が出た。そこで, 話し合いの結果が納得できるものだったら実施するという条件で, 学活の時間に話し合うことにした。「目的は何なのか」から始まり, とりあえずは全ての班が実施することには賛成ということで, 種目やルールなどについて話し合うことになった。班の仲間意識を深めること, そして学級全体の仲間意識を深めることが目的なので, 男女混合で参加できる球技大会をすることになった。参加人数を考えるとバスケットボールとバレーボールが良いということになった。話し合いもきちんと行われ, 目的も納得できるものであったので, 結果を尊重しできるだけはや

く実施できるようにしていくと伝えて学活は終了した。はっきり「やる」と言わなかったのは, 昨年度に同様のレクを行おうとしたところ, 場所の予約や学校全体, 特に学年の中で了解をえる必要があるということがわかったからだった。学活の時間は年間計画に沿って計画的に行うべきであり, 一クラスだけが何度もレクを行うと他のクラスでも生徒がレクばかりをやりたがることになってしまうこともある。そうしたことに配慮して実施してよいものか判断する必要あるということだった。すぐに, 学年主任に相談をし, 管理職からも了解を得ることができたので実施することにした。帰りの会で生徒に伝えると, 全員がとても嬉しそうだった。生徒が, 楽しみにしていた球技大会は全員が参加して盛り上がった。自分たちの提案を基に, 自分たちが話し合っ実施することができ, 全員で協力して楽しく過ごすことができたという経験の積み重ねが, 「望ましい人間関係の確立」や「男女相互の理解と協力」に良い効果を及ぼしたと思う。

他にも次のような記事が書かれていた。

「友達又は親友! きみはいるかな?」

きみは, 相談できて, なんでも話せて, かくしごとをしない親友, あるいは友達がいる? そういう人は, ほとんどいないと思います。でも心の中では, そういう友達がほしいなあ〜と思う人が中にはいるんじゃない? このクラスだけではなく, 他のクラスでもいいから, よ〜く考えて, この人は, 私の親友になれそうだと思ったら, 親しくして一番の友達をつくろう!

私は, 友達, 親友がいるととても便利で, いやなことでも話せば「すー」とすると思う。あなたも, この中学生生活の中で, いちばんの仲の良い友達, あるいは親友を見つけてはどう?

この中学生生活が晴れやかになると思うん

だ。さっそく親友、友達をつくって親しくなるう。

友達のいない子は、みんなの中に入って話したり遊んだりすれば、きっといい友達ができると思うよ～！

4班新聞「椿嵐坊漫」第4号から

言葉遣いや表現に問題がないわけではない。しかし、中学校時代の友だちの大切さについて書いてくれたことに意味があると思った。担任をしているクラスだけではなく、他のクラスの生徒にも機会があれば、自分の経験などを通して友だちの大切さについて話をしていた。彼らが私の思いに共感して書いてくれたと思い嬉しかった。教え子からの手紙の中で、当時の活動やクラスについて次のようなことが書いてあった。

「先生の言動や学校行事・学活などを通して、もの事のとらえ方は一つではなく、それぞれの考え方が尊重されることがあるということを知ると同時に、自分の考えはどこなのだと自問自答する初めてのきっかけだったと記憶しています。先生と一緒に家出をした女子を探し回ったこと、卒業式で先生が名簿を見ずに生徒の名目を呼称してくれたのは、その当時の我々には心に響く行為だったと記憶しています。……

あの当時の我々にとって学級は *h o m e t o w n* であり、級友は *f a m i l y* だったのかもしれない。勿論、帰るべき本来の家も家族もあるのですが、多感な時期には本来の家と家族とは別に、親には言えないことを言える、いわゆる *h o m e t o w n* や *f a m i l y* のようなものは必要だと思います。この *h o m e t o w n* や *f a m i l y* がなかったり、その存在がおかしい方向に行くと、ややこしい問題になるのでしょうか、あの頃のK中学校はその意味では、学級は *h o m e t o w n* であり級友は *f a m i l y* でした。

最近では、同級生のお父さんお母さん方がご高

齢で他界されます。葬儀等で話題になるのは、あのお母さんは遊びに行くときによくおやつ出してくれたとか、あのお母さんにはよく叱られ、あそこのお父さんには海に連れて行って貰ったとかまさに“家族”でした。」 (A S)

当時の生徒とは、今でもクラス会や同窓会で会うことがある。その度に、当時のままの呼び方で呼び合い、楽しげに語り合う姿をよく見かける。そして「先生俺たち今でも時々会って飲んでいるんだ」「中学校時代の友だちって気を遣わずに、いろいろなことを話せるから良いよね」という言葉を耳にする。中学校時代の良好な人間関係がいつまでも続くように願っている。

10 その後

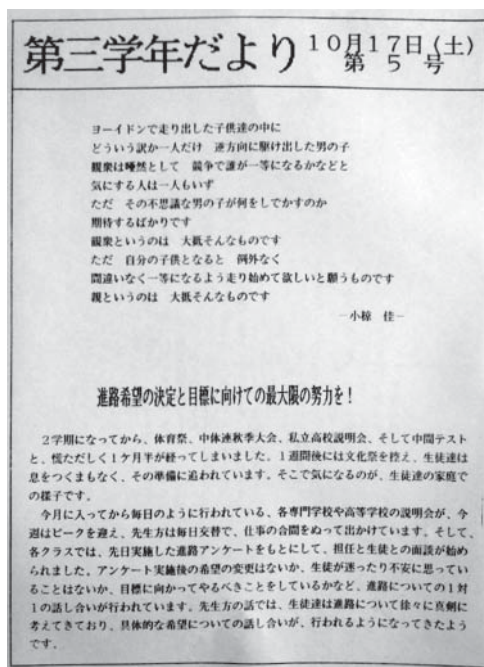
3年間生活を共にした彼らが卒業すると同時に、M中学校に異動となった。17年間在籍し担任、学年主任、生徒指導担当教諭を担当した。当初は、管理的な生徒指導や旧態然とした授業などに疑問を感じ、風穴を開けようと試みたが生徒数のピーク時には42学級、教職員数70名を超える過大規模校であり、簡単に変えることはできなかった。せめて自分のクラスだけでもと思い、前任校と同じように学活での話し合い活動、日直や係り活動、班活動、掲示物や学級(班)新聞作り、学級行事などに取り組み、学級通信を出し続けた。しかし、K中学校時代の様には生徒が積極的に活動や発言をすることはなかった。やがて、管理的で高圧的な生徒指導や学級活動にあまり疑問を感じなくなり、全ての生徒が教師の指導に従い規律ある行動を取ることができる学年を目指すようになっていった。特に、移動してから7年間は所属職員があまり変わらない学年に入り、若い職員が多く管理的で規律を重んじる風潮に疑問を感じることなく、きまりを守り統一の取れた規律あるクラス経営を目指すようになっていった。生徒の意

見や思いには徐々に耳を貸さなくなり、生徒との距離も遠くなっていった。しかし、異動8年後に受け持った学年で、初めて管理的で高圧的な指導の限界を感じるようになった。2年生になると力では生徒を抑えきれなくなり学年崩壊状態となり、長い教員生活で生徒指導に関して最も苦勞した3年間だった。

次の学年では学年主任となり、初めて担任をはずれることになった。「一人ひとりが安心して楽しく過ごすことができ、お互いに高め合い成長することができる学年」を学年目標とした。前の3年間の反省から、教員の人間関係と協力的体制づくりに腐心した。次に、生徒が主体的に活動や行動ができるようにしていくために、特別活動と道徳の時間の充実と有効活用をめざすことにした。学年会で情報交換を行い、特活の時間は、できる限り全学級が学年で共通した内容や活動となるようにした。道徳の授業は、教員同士が他のクラスを参観したりクラスを交換して授業を行い、学年会で意見交換や情報交換を行うようにした。特別活動では、全クラスで班活動と係り活動を取り入れ、学級委員が中心となって学年学級委員会が組織され、学年行事や生徒の問題・課題などについて活発な話し合いが行われた。少しずつ学級間の隔たりがなくなり、球技大会など生徒が企画・運営した学年行事はとても盛り上がり大成功となった。1学年終了時には、学年職員の人間関係は良好な感じとなり、生徒も穏やかで楽しそうな学校生活を送るようになっていった。

主任として学年通信を毎月発行していくと、8名の担任がいつの間にか全員学級通信を発行するようになった。教室が温かい雰囲気のある生活の場となるように、教室内の環境整備と掲示物作りにも学年全体で取り組むことにした。放課後、教室を見回ると担任と生徒が掲示物作りや談笑する姿をよく見かけるようになった。2年生の遠足や3年生の修学旅行などの学年行事は、学級委員会が中心となり「約束を守って楽しもう」という意識が広がり、教員も生徒を信

頼し安心して任せてみようという気持ちになっていった。3年生になった時にある保護者から、「子どもが今の学年ならどの先生が担任になっても良いと言っている」と聞かされた。教員と生徒、教員と保護者の信頼と良好な人間関係が築かれていることを確信できたとともに、「良好な人間関係と信頼関係がなければ、効果的で有効な教育はできない」と言った先輩教員の言葉を思い出した。そして、その三年間の経験が大きな転機となり新任時代を思い出し原点に戻ることができた。その後、生徒指導担当教諭、教頭、校長になってからも、その時の気持ちを忘れることなく「安心して楽しく過ごすことができ、互いに高め合い成長することができる学校」を目標に、日々の教育活動に取り組んできた。



M中学校第3学年だより第5号

【参考文献】

- (1) 文部科学省「中学校学習指導要領解説」特別活動編 ぎょうせい